

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 10 日現在

機関番号：16301

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12805

研究課題名（和文）瑜伽行派の初期文献における種姓説の注釈史的研究

研究課題名（英文）A Historical Study on the gotra Theory in the Commentaries on Early Yogacara Literature

研究代表者

岡田 英作 (Okada, Eisaku)

愛媛大学・教育学研究科・助教

研究者番号：90824144

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、インド大乘仏教の瑜伽行（ヨーガの実践）派における初期文献『菩薩地』『大乘莊嚴經論頌』と、両論に対する中期・後期の注釈文献とを対象として、種姓（素質）説の思想的変遷の解明に取り組んだ。特にその成果として、各文献に共通して解説が認められる、先天的な本性住種姓および後天的な習所成種姓という二種姓について、5、6世紀頃には異説が認められないが、それ以降の、著者問題を抱える『経莊嚴注疏』ならびにサーガラメーガ（8世紀頃）著『菩薩地解説』には互いに類似する説が3つ伝わっていることを明らかにし、そうした説は『菩薩地』以降の種姓説に関連する教理の展開との整合性をとる中で生じてきた可能性を指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、種姓説の史的展開という観点を探り入れ、瑜伽行派の中期から後期への展開に光をあてる点に独自性がある。その学術的・社会的意義は、（1）種姓説の史的展開の全貌を再構築することに向けた基盤となる点、（2）他の瑜伽行派思想に関する研究分野に対して、初期から後期までの瑜伽行派文献を縦断的に扱う研究モデルを提示する点、（3）種姓説の伝わる中央・東アジア仏教圏における仏教思想の独自性の解明という発展的研究に展開し得る点である。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to clarify the philosophical transition of the theory of gotra (qualities) within the early texts of the Yogacara school in Indian Mahayana Buddhism, including the Bodhisattvabhumi and Mahayanasutralamkarakarika, along with middle and late commentaries on these texts. The analysis revealed a consistent understanding of the two types of gotra - inherent prakrtisthagotra and acquired samudanitagotra - across all texts up to the 5th and 6th centuries. However, later commentaries, such as the Sutralamkaravrttibhasya, whose authorship is questioned by scholars, and the Bodhisattvabhumi vyakhya by Sagaramegha (8th century), introduce three interpretations which are almost identical in both texts. These interpretations likely developed as part of an ongoing doctrinal evolution related to the gotra theory post-Bodhisattvabhumi.

研究分野：仏教学

キーワード：瑜伽行派 種姓 gotra 本性住種姓 習所成種性 菩薩地 大乘莊嚴經論 注釈文献

## 1. 研究開始当初の背景

あらゆる衆生(生き物存在)が悟りの可能性を有しているか、衆生の中にそうした可能性を全く欠いた者がいるかは、インドのみならず中国や日本などの大乘仏教圏を中心に議論されてきた、修行者には修道論、衆生には救済論の根幹を成す深刻な問題である。インド大乘仏教の二大派の一翼を担う瑜伽行(ヨーガの実践)派は、この問題に対して、種姓(gotra)という概念を、衆生の有する悟りへの素質を意味するものとして採用し、独自に説を展開して、他学派や他地域の仏教圏にも多大な影響を与えた。そうした瑜伽行派における種姓説を瑜伽行派の思想史、広くは仏教思想史の中に正確に位置付けるためには、その史的展開を再構築しなければならない。

瑜伽行派における種姓説については、David Seyfort Ruegg 著『如来蔵・種姓論』(*La théorie du tathāgatagarbha et du gotra*, Paris: Adrien-Maisonneuve, 1969)や高崎直道著『如来蔵思想の形成』(春秋社、1974)に代表される如来蔵(すべての衆生に仏陀と同じ悟りの可能性を認める)思想に関する二大研究において、如来蔵思想の関連概念として注目されたことを契機に、研究が個別に蓄積されてきた。研究代表者自身も瑜伽行派の初期から中期(瑜伽行派の教理の基礎を築いたアサンガ(ca. 330-405)・ヴァスバンドゥ(ca. 350-430)両論師の時代)までの種姓説の展開の解明に努め、中期瑜伽行派の段階では種姓説が積極的に採用されなくなることをこれまで明らかにしてきたが、瑜伽行派における種姓説に関する従来の研究は、その史的展開という観点を欠いたものであった。したがって、中期瑜伽行派の段階で積極的に採用されなくなった種姓説が、アサンガ・ヴァスバンドゥよりも後代の後期瑜伽行派の段階で再び、多くの文献、特に注釈文献の中で議論されることになる点も、問題視されることはこれまでなかった。種姓説が瑜伽行派の中期から後期へといかなる展開を経て、なぜ後期になって再論されたかを明らかにすることは、瑜伽行派における種姓説の史的展開を再構築するために欠くことができない。

## 2. 研究の目的

瑜伽行派における種姓説の史的展開を再構築するにあたり、本研究では、初期瑜伽行派の主要典籍とそれ以降の中期・後期瑜伽行派の注釈文献とを対象として、種姓に関する記述を回収・分析することで、中期から後期瑜伽行派へという注釈史という点から、瑜伽行派における種姓説の思想的変遷を明らかにすることを目的とする。主な文献としては、初期瑜伽行派の文献の中でも種姓を主題として取り上げて独立した章を設ける『瑜伽師地論』『菩薩地』(以下『菩薩地』)ならびに『大乘莊嚴經論頌』と、両論に対する中期・後期瑜伽行派の注釈文献とを調査対象とする。

## 3. 研究の方法

本研究は、研究の基礎を為す文献研究とそれに基づく思想研究とから成る。

まず文献研究としては、具体的には、種姓を主題とする章を有する『菩薩地』とその影響を受けて成立した『大乘莊嚴經論頌』との初期瑜伽行派の文献を起点に、論師の年代がある程度判明している文献、すなわち、中期瑜伽行派の文献としては、『大乘莊嚴經論頌』の注釈文献である、ヴァスバンドゥ(ca. 350-430)著『大乘莊嚴經論釈』、後期瑜伽行派の文献としては、『菩薩地』の注釈文献である、グナプラバ(5-6世紀頃)著『菩薩地注』・サーガラメーガ(8世紀末)著『菩薩地解説』、ヴァスバンドゥによる散文注を含む『大乘莊嚴經論』の注釈文献である、アスヴァパーヴァ(ca. -500-)著『大乘莊嚴經論広注』・ステイラマティ(ca. 510-570)著とされている『経莊嚴注疏』を調査対象とする。以上の諸文献を、(1)『菩薩地』、(2)『菩薩地』注釈文献、(3)『大乘莊嚴經論』とその注釈文献という3段階に分け、種姓に関する記述を回収し、参照可能な版本や写本を用いてサンスクリット語やチベット語訳のテキストを校訂し、諸訳を対照しながら翻訳する。

つぎに思想研究としては、文献研究で扱った各文献において、特に議論が展開する種姓説のテーマを明確にした上で、その中でも各注釈文献に共通して解説が認められる種姓説を見出し、後期瑜伽行派で種姓説が再論された背景を検討する。そして、これらの注釈文献に基づく瑜伽行派の中期から後期への種姓説の史的展開を描き出す。

## 4. 研究成果

本研究では、(1)『菩薩地』、(2)『菩薩地』注釈文献、(3)『大乘莊嚴經論』とその注釈文献という3段階から成る文献研究と、それに基づく思想研究とに分けて研究を進めた。そこで得られた成果の概要は以下の通りである。

(1)『菩薩地』に関しては、種姓が主題の第1章「種姓品」を中心に読解を進め、種姓に関する言及のある他の章との関係性にも注意を払った。具体的には、第2章「発心品」・第6章「成熟品」・第8章「力種姓品」・第18章「菩薩功德品」・第22章「住品」をはじめとした計16章における種姓に関する記述を回収し、『菩薩地』における種姓説の全体像を把握することができた。

(2)『菩薩地』注釈文献に関しては、チベット語訳のみ現存する後期瑜伽行派の『菩薩地注』『菩薩地解説』について、『菩薩地』から回収した種姓に関する記述に基づいて、その注釈を網

羅的に回収し、第1章「種姓品」に対する注釈を中心に読解を進めた。

『菩薩地』ならびにその注釈文献に関する思想研究の成果の一部として、2本の論文を発表した。まず、『菩薩地注』『菩薩地解説』という両注釈文献における「種姓品」の構成に関する注釈を紹介、検討し、構成に関する理解の異同を明らかにするとともに、両注釈書間の参照関係の可能性を指摘した。つぎに、『菩薩地』における衆生観として、菩薩という修行者が利他の対象とする一切衆生に焦点化して検討した結果、そこに種姓の有無に応じて限定された「一切」と理解される場合があることを明らかにし、こうした理解が『菩薩地注』『菩薩地解説』といった注釈文献からも支持されることを指摘した。また、文献研究の成果の一部として、『菩薩地』の「種姓品」ならびに同論から回収した種姓に関する記述については、校訂テキストや翻訳を含む研究を近く発表することを予定している。

(3)『大乘莊嚴經論』とその注釈文献に関しては、『大乘莊嚴經論頌』と中期瑜伽行派の注釈文献『大乘莊嚴經論釈』とについて、種姓に関する記述を網羅的に回収し、「種姓品」を中心に読解を進め、種姓説の枠組みを把握することができた。つぎに、チベット語訳のみ現存する後期瑜伽行派の『大乘莊嚴經論広注』『経莊嚴注疏』における種姓に関する記述について、「種姓品」に対する注釈を中心に読解を進めた。

『大乘莊嚴經論』とその注釈文献に関する思想研究の成果の一部として、2本の論文を発表した。まず、『経莊嚴注疏』における種姓に関する注釈中に引用される、仏弟子である舍利弗の説話について、同様の説話が見出される鳩摩羅什(344-413/350-409)訳『大智度論』との異同を検討し、文献間の伝承の相違点とその背景を明らかにした。つぎに、『大乘莊嚴經論』注釈文献も援用しつつ、『大乘莊嚴經論』『種姓品』の構成を『菩薩地』『種姓品』との対応関係に着目して再考した結果として、『大乘莊嚴經論』『種姓品』には、『菩薩地』『種姓品』と比べて思想的な発展性が認められる点、『菩薩地』『種姓品』にまったく対応のない偈頌の項目については、種姓説の独自性と見做し得る点を指摘した。さらに、『大乘莊嚴經論』『種姓品』の偈頌の内容や配列の理解には、『菩薩地』『種姓品』が手助けになることがあり、『大乘莊嚴經論』の偈頌を読み進めるにあたっては、『菩薩地』などの『莊嚴經論』以前の文献に基づく理解にも注意を払う必要がある点も指摘した。また、文献研究を通じて得られた知見については、龍谷大学仏教文化研究所の『大乘莊嚴經論』研究会にその一部を提供し、その成果として、種姓を主題とする第3章「種姓品」と同章に対する諸々の注釈文献を含めた校訂テキストならびに和訳と注解を、早島慧編『『大乘莊嚴經論』第III章の和訳と注解 菩薩の種姓』(法蔵館、2024)として共著のかたちで発表した。

以上のように別々に分析してきた注釈文献、すなわち『菩薩地』に対する注釈文献『菩薩地注』『菩薩地解説』ならびに『大乘莊嚴經論』に対する注釈文献『大乘莊嚴經論広注』『経莊嚴注疏』を対象として、これらの文献に基づく瑜伽行派の中期から後期への種説の史的展開の解明に取り組み、その成果の一部として、1本の論文を発表した。具体的には、諸注釈文献に共通して解説が認められる、先天的な本性住種姓および後天的な習所成種姓という二種姓に関する注釈を見出した。そこに異説が挙がる過程を通じて、5、6世紀頃には異説が認められないが、それ以降の、著者問題を抱える『経莊嚴注疏』ならびにサーガラメーガ(8世紀頃)著『菩薩地解説』には互いに類似する説が3つ伝わっている、という二種姓に関する思想的展開を明らかにし、二種姓に関する注釈内容の分析から、後期瑜伽行派において種姓説が再論された一背景について、『菩薩地』以降の種姓説に関連する教理の展開との整合性をとる中で生じてきた可能性を指摘した。

研究期間全体を通じて実施した研究によって、種姓を主題として詳説する初期瑜伽行派文献を主軸として、それに対する中期から後期瑜伽行派までの注釈文献における種姓説の史的展開の一端を、次のように明らかにすることができた。すなわち、本研究の調査対象の範囲において特に議論が展開する種姓説のテーマとは、二種姓に関するものであるという新たな知見が得られ、また、後期瑜伽行派において種姓説が再論された一背景として、『菩薩地』以降の種姓説に関連する教理の展開との整合性の問題があることを突き止め、瑜伽行派における種姓説の史的展開の解明に向けて、研究を前進させることができた。瑜伽行派の中期から後期への種姓説の一展開を明らかにした、以上のような本研究の成果は、瑜伽行派における種姓説の史的展開の全貌を再構築することに向けた基盤となる研究であるとともに、種姓説の伝わったチベットや中国・日本といった中央・東アジア仏教圏における仏教思想の独自性の解明、という発展的研究に欠かせない基礎的研究としても位置付けられる。

今後の展望として、『菩薩地』以降の種姓説に関連する教理のひとつに、種姓説に代わる理論として提出された聞熏習種子(聴聞の潜在印象という種子)説があるが、同説はアーヤ識(一切の存在を生み出す根源的な心)説との関連のもとで説示されるため、こうした学説との関係をも考慮して、種姓説を研究していく必要がある。いっぽう、本研究で得られた成果には、未発表のものも残されている。特に文献研究としての成果のうち、『菩薩地』注釈文献については、種姓に関する記述を網羅的に回収し、ひと通り読み進めたものの、断片的な記述が多く、翻訳を確定することが困難な箇所を残しているため、それらの情報を整理して論文のかたちにとまとめるに至らなかった。こうした課題については、本研究課題終了後も、研究を継続して、その成果を論文等のかたちで発表したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 岡田英作	4. 巻 -
2. 論文標題 『大乘莊嚴經論』 「種姓品」の構成に関する一考察 『菩薩地』 「種姓品」との対応関係に着目して	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 『大乘莊嚴經論』 第 章の和訳と注解 菩薩の種姓	6. 最初と最後の頁 324-358
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡田英作	4. 巻 -
2. 論文標題 瑜伽行派における本性住種姓と習所成種姓 『菩薩地』ならびに『大乘莊嚴經論』の注釈文献を中心として	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 密教文化	6. 最初と最後の頁 forthcoming
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡田英作	4. 巻 87
2. 論文標題 『菩薩地』における衆生観	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 日本佛教學會年報	6. 最初と最後の頁 181-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡田英作	4. 巻 249/250
2. 論文標題 『菩薩地』 「種姓品」の構成に関する一考察 『菩薩地』注釈文献をもとに	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 密教文化	6. 最初と最後の頁 forthcoming
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡田英作	4. 巻 247
2. 論文標題 舍利弗と乞眼婆羅門 文献間の伝承の異同を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 密教文化	6. 最初と最後の頁 46-22 (109-133)
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計4件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 岡田英作
2. 発表標題 瑜伽行派における本性住種姓と習所成種姓 『菩薩地』ならびに『大乘莊嚴經論』の注釈文献を中心として
3. 学会等名 密教研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 岡田英作
2. 発表標題 『菩薩地』 「種姓品」の構成に関する一考察 『菩薩地』注釈文献をもとに
3. 学会等名 密教研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田英作
2. 発表標題 『菩薩地』における衆生観
3. 学会等名 日本佛教学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岡田英作
2. 発表標題 舍利弗と乞眼婆羅門 文献間の伝承の異同を中心として
3. 学会等名 密教研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 早島慧（編集）・上野隆平・岡田英作・桂紹隆・加納和雄・北山祐誓・桑月一仁・間中充・高務祐輝・内藤昭文・中山慧輝・能仁正顕・乗山悟・早島理・早島慧・藤田祥道・若原雄昭（翻訳・執筆）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 392
3. 書名 『大乘莊嚴經論』第 章の和訳と注解 菩薩の種姓	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------